

# 日本脳炎

確認を  
お願いします

接種回数  
不足しています

日本脳炎の予防接種は、接種を受けた人が重症になる疑いがあったことから、国の勧告により平成17年5月から、全国的に接種が控

えられてきました。その後、新たなワクチンが開発され、平成19年度以降に生まれた人に対しては通常どおり接種されています。しかし、平成7年6月1日から平成19年4月1日

生まれの人については、これまで積極的な接種勧奨が行われてこなかったため、国の予防接種法で定められている接種回数(4回)が不足している可能性があります。

このたび、接種方法が一部改正され、平成7年6月1日から平成19年4月1日

歳未満までの間、不足分の予防接種を無料で受けることができるようになります。(左表大枠内)

なお、対象者の一部にはすでに予防接種を送付しています。まだ送付されていない対象者についても、順次発送する予定です。

対象者の生年月日 (23年度の学年など)	当町の接種状況とこれからの接種方法	
	1 期 (3回接種)	2 期 (1回接種)
H7.4.1生まれ以前 (高校2年生以上)	接種済みです。	接種済みです。
H7.4.2~H7.5.31生まれ (高校1年生の4~5月生まれ)	接種済みです。	未接種となっているため、20歳未満までの接種者に対し接種費用を全額助成します。
H7.6.1~H19.4.1生まれ (高校1年生の6月以降生まれから5歳の保育園年中まで)	一部または全部が未接種となっていますので、接種してください。接種方法は、国が定める特例対象者の接種方法が適用されますので、以下を参照してください。 <b>◆接種方法について</b> <b>(1) 1度も接種したことがない人</b> ①1期初回 1回目の接種から、6日~28日の間隔をおいて2回接種。 ②1期追加 1期初回2回目から約1年の間隔をおいて1回接種。 ③2期 9歳以上の人は、1期追加終了後6日以上の間隔をおいて1回接種。 <b>(2) 2回接種している人 (1期初回完了者)</b> ①1期追加(1回)を接種。 ②9歳以上の人は、1期追加終了後6日以上の間隔をおいて、2期(1回)を接種。 <b>(3) 3回接種している人 (1期追加完了者)</b> 9歳以上の人は、1期追加終了後6日以上の間隔をおいて、2期(1回)を接種。	未接種となっているため、接種する必要があります。接種方法は、9歳~20歳未満の範囲内で接種してください。 ※9歳未満の人は9歳になってから接種してください。 ※接種間隔については、左記をご覧ください。
H19.4.2生まれ以降 (4歳の保育園年少から3歳)	日本脳炎の標準的なスケジュールにそって実施されています。ただし、3歳になった人でまだ接種していない人は早めに接種してください。	9~10歳の間に接種してください。



## 日本脳炎の標準的なスケジュール

■1期 (3回接種)  
初回→3歳になったら6~28日の間隔をおいて2回接種  
追加→4歳になったら初回の2回目から約1年の間隔をおいて接種

■2期 (1回接種)  
9歳になったら接種

■合計 4回

■一部の母子健康手帳の「日本脳炎」の接種履歴欄は、1期追加までの履歴しか記載できないようになっています。裏面の「その他の予防接種」欄もご確認ください。

■日本脳炎に関するお問い合わせは、健康福祉課(内線157~159)へ。

にいる菌でもあります。

つまり、小さい子どもが多くいるところでは常に感染の機会があります。したがって、早くから保育園に入る子どもたち(とくに免疫のない生後6ヵ月から3歳までの子どもたち)にとっては怖い菌です。

しかし、これらには免疫を強くするワクチンがあり、今年から全国無料で接種できるようになりました。3歳未満でぜんそくやアトピー性皮膚炎など基礎疾患のある子どもさんや、保育園などで集団生活をするお子さんには積極的に受けてほしいと思います。生後2ヵ月から受けられますが、接種のスケジュールについては保健師や看護師に相談してください。

## 2. 麻疹・風疹のワクチンも定期的に受けましょう

同じ理由で半年を過ぎると、ウイルス感染にもかかりやすくなります。ただし、お母さんからの免疫(移行抗体)が多少残っていることもあり、ワクチンは基本的に1歳以降が対象となります。麻疹・風疹、水痘、おたふくなど接種可能なワクチンがあり、外来で予約をしていただければいつでも受けられます。

万が一、ご両親がそれらの病気にかかっているときには、お子さんばかりではなく、ご両親もワクチンをすべきです。

## 3. 高熱を出したら受診して!

これまで述べたように、ワクチンは免疫を強くするために有効な手段ですが、接種のあと免疫が出来上がるまでに多少時間がかかります。それまでの間は、感染症にかからない努力が必要ですが、それでもかかってしまうことはあります。高熱や風邪症状が続くときは(特に高熱だけのときは、危険なことがあります)、病院を受診して診察を受けるのが良いでしょう。

葛巻病院では今年から微量の血液で検査できる機器を用意し、赤ちゃんの検査もできるようになりました。必要であれば検査もしますので、遠慮なく相談してください。

「風邪の9割はウイルス感染」で、特効薬がないから病院に行っても仕方がない、というのは健康な成人の場合にいえることです。「弱い乳児と高齢者」の発熱の原因は細菌感染のことも多く、有効な治療(抗生剤の投与など)が必要なことがあるのです。

心配なときはいつでも受診しましょう。子どもを守るためにためらわないでください。

# 3歳未満は免疫不全… ワクチンの勧め

葛巻病院小児科  
小西峯生先生



「乳児と高齢者は病気に弱い」といわれますが、それには2つの意味があります。

1つは成人レベルの身体的機能がない(=未熟:体の基本は3歳で出来上がり成長し、老化で衰える)、2つ目は免疫(病気に対する抵抗力)的にも弱いので感染症にかかりやすいということです。

「免疫的に弱い」とは、生まれてくるときお母さんにもらった免疫が徐々になくなり、生後6ヶ月を境に免疫がほとんどない「免疫不全」の状態になり、風邪などにかかりやすくなるということです。逆にいえば風邪をひくことで免疫ができて小学生以降になると丈夫になる、そして年をとると免疫が低下して、また感染症にかかりやすくなるといえます。

全てが軽い風邪であれば問題はないのですが、肺炎や脳炎・髄膜炎など命に関わる病気になると困ります。では、どのようにすれば最悪の状態を避けられるのでしょうか?

## 1. ヒブ・肺炎球菌ワクチンの勧め

乳児の細菌感染症の代表といえば、インフルエンザ<sup>かんきん</sup>桿菌(Haemophilus influenzae type B, Hib:ヒブ)と肺炎球菌です。どちらも咽頭炎・中耳炎や肺炎・髄膜炎の原因となる菌ですが、多くの子どもの「鼻やのど」



おひるごはんはたのしいな(葛巻保育園)